放眼日中

「親日国資源」の無駄遣い

昨年、中国では反日暴動などが大きくクローズアップされたため、外国人の友人の中には「どうして日本企業は自らが反日国家と呼ぶ国で事業をしようとしているのか」と、不思議そうに真顔で聞いてくる人がたまにいる。

筆者はここ2年アジアを歩き回り、「確かに親日国が多い」と感じているので、その友人の言葉に重みを感じる。

親日的と言えば台湾。以前台湾には日本語が流暢に話せる世代がいて、日本と商売する、一緒に仕事をすることを喜んでくれる人々がいた。だが、米国留学で経営学修士（MBA）などを取得した2世、3世の時代になると、日本に親近感を持ってはいても商売の仕方は米国流になり、日本企業と相容れないケースも多い。「台湾企業を活用して大陸を攻める」などと謳った雑誌もあったが、突然仲良くしようと言っても相手は振り向かない。昔好きだと言われた女の子に、かなり後になって言い寄るようなものではないだろうか。

ミャンマーも超親日国ではあるが、日本企業でこの国に注目していたところは一昨年まではごく僅かだった。ところが、米国のヒラリー・クリントン国務長官（当時）の訪問により、突然全ての門戸が開かれたように、日本人ビジネスマンがなだれ込んだ。5年前には日本人ジャーナリストが殺害され、日本人だけはミャンマーに寄り付かなかったのに、突然手のひらを返したように今になって殺到する日本人の動きに振り回されている、ミャンマーで日本語を使って仕事をしている人々の中には複雑な思いを持つ人もいる。

そしてトルコ。親日国だと言われて久しいが、最近の日本の現状を知っているトルコ人は少ない。トルコは親日だが知日ではない。その理由は「日本人がトルコをアジアの片隅、またはヨーロッパの端として、積極的に対応してこなかったから」。あるトルコ人曰く、「昔それほどかわいくなかった女の子（トルコ）が、月日がたって結構な美人になり、いろいろな男性（欧米など）から声を掛けられるが、女の子が好きな男性（日本）は相変わらず見向きもしない。そんな男もいるんだなあ」。

トルコは平均年齢29歳、1人当たり国内総生産（GDP）は1万ドルに達し、地政学的に見ても、中東、欧州、中央アジアの真ん中に位置する極めて重要な国だ。何とか「親日」を生かせないものだろうか。

北京に長く住む大学の後輩がある時つぶやいた。「北京に住んでいると、親日国が羨ましくして仕方がない。なぜ日本はこの資源を無駄遣いしているのか」。

日本では毎日のように中国の行動を非難する声が上がっており、日中の狭間に立つ中国の日本人駐在員は厳しい局面にぶち当たっていることから、親日国と言われる所へ転勤したい、と願っている人も少なくないはずだ。

ただ、「何故反日国家で事業をしようとしているか」との問いへの答えを再度検討してみる必要はあるが、「そうは言っても中国は外せない」といった意見も出て来そうで、中国在住者の苦悩は当分続きそうだ。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。